



## NOLTA ソサイエティ雑談

Ramble on about NOLTA Society

次期 NOLTA ソサイエティ会長 上田 哲史

元号が平成から令和と変わったばかりの、やわらかく風薫る、やや霞のかかった日和の連休中日である。本稿の執筆依頼を3月に受けてから今日に至るまで準備せず、連休の前半は、心の片隅にややよぎるプレッシャーを感じつつも雑事に没頭していた。いわゆる逃避である。しかし、締切はじわじわと近づいてる。観念してPCに向かうとする。あいさつ記事は、当然「継承的で無難な」「ニッチ」路線を押さえることが基本であろう。踏襲とはいい言葉だ。

前々年度のNOLTA ソサイエティ (NLS) 会長の池口先生によるあいさつ記事<sup>(4)</sup>を読み始める。当時の現状と課題を、半ば公約ベースでまとめており、(少なくとも本記事のスタイルに関して) 踏襲を目標む筆者にとっては到底真似をすることができない。やや手に汗を握りつつ、前年度神野先生の記事<sup>(6)</sup>に目を走らせる。インパクトのある著者紹介写真とは対照的に内容は、NLSの沿革や現状、将来展望まできめ細かく記述・分析された全方位解説だった。前々年度の内容とすみ分けがよくできたものだなと感心する。NLSに御興味のある会員におかれましては、平成29年度および30年度会長あいさつ記事を御一読頂ければ、NLSのなんたるかは全てお分かり頂けます。

焦りが募るので、Fundamentals Review 誌アーカイブから残りの歴代NLS会長あいさつをダウンロードして分析し始める。合原先生<sup>(2)</sup>、土居先生<sup>(3)</sup>の記事で、期待どおりの癒しを得ることができ、焦燥感は低減されたものの、今度は自分の執筆すべき記事の方向性を見失うこととなった。そこで無駄な抵抗、もとい、踏襲および空隙探しをやめ、執筆方針をもう「NLSについて普段思ってること」に切り替えることとする。

今どきの大学や研究機関では、業績の評価指標として英語論文出版が重要視され始めているが、NLSはシンポジウムから論文誌まで、一貫した「国際」化が図られている<sup>(5)</sup>。NLSに学生から所属して一定活躍すれば、学術的・国際的キャリアプラン形成が約束されている——はずである。研究に携わり始めたばかりの若手が、少しまとまった研究結果が出るようになれば、NOLTA ソサイエティ大会、非線形問題研究会 (NLP) や複雑コミュニケーションサイエンス研究会 (CCS) で度胸を試し、更に英語化してNOLTA シンポ

ジウムで発表、国際的に通用するかどうかを占う。仕上げはNLSの論文誌であるNOLTA ジャーナルに投稿、という流れがNLSとしてはぜひ確立したいシナリオに思われる。

NOLTA シンポジウムは非線形理論における国際交流の場として認知され、定着している。非線形工学の他の国際会議とセットとなり、1年のうちどれどれに参加する旅程を組むのかは、毎年関係者の話題となるところである。一方、NOLTA ジャーナルは、海外の編集委員、査読委員に多く参画頂き、業界の潮流をにらみつつ新規開拓の精神で特集号を企画しており、国際オープンアクセスジャーナルとして成長を続けている。

しかし、NOLTA ジャーナルにはNOLTA シンポジウムに連動した特集号も組み入れられてはいるものの一般投稿が少なく、上記シナリオはまだ完成されていない感がある。現在、論文内容が非線形分野であっても、ESSの和文・英文論文誌に投稿しているというNLS会員も少なくはないと思われる。NOLTA ジャーナルに食指が動かないのは、英語であること、Impact Factor等の指標が付いていないこと、査読結果が辛口であること、などが原因として聞こえてきている。NLS会員(研究者・学生)が、論文投稿先としてNOLTA ジャーナルを自然に選ぶよう、NLP、CSS両研究会およびソサイエティ大会における周知・プロモーションや、特に学生に対しては英語の壁を克服してもらうための組織的施策も検討する必要があるかもしれない。なお、査読期間をより短縮するべく、編集委員会は編集委員との連絡体制改善を図ろうと努力している。投稿の動機となり得る、メジャーな文献データベースへの登録や指標の獲得には、一定数の投稿数、抑制された採録率、掲載論文の質の高さ、多数の被引用数が必要、という因果性のジレンマとなっている。まだ付加価値の整備には時間がかかることにはなりますが、シナリオ実現のためにぜひNOLTA ジャーナルへの投稿をお願い申し上げます。

さて、研究会、シンポジウムもその発表者の多くは学生であり、歴代会長のあいさつにも学生や若手への期待や心配が述べられている。筆者もかれこれ30年近く、学生時代からNLP、NOLTAをプラットフォームに活動が続けてきて、NLS関係の指導者である先生方を、近距離から観察してき

た。常々感心するのは、先生方の懇親会における学生への激励である。もちろん、発表を聴いた上での技術的な議論に花を咲かせることもあるが、なにせそれぞれの学生の持ち味を捉えた、やる気を惹起する魔法の言葉が次々学生に投げかけられるのである。それらは単におだてではなく、むしろ挑発的なコメントだったりもする。また、学生は自分の研究室の先生からそれらを聞かされることは皆無かもしれないのも特徴である。励まされて一層研究に熱が入ったり、あこがれて博士課程に進学を決めたりした、といった話は NLS 界限ではよく聞く。NLS の先生方は、そそのかしというと語弊があると思うが、本当に学生をその気にさせるのが“うまい”のである。

長年 ESS と連携して活動している NLS においても、基礎的・境界的分野が意欲的に取り組まれている。産業界が実学ばかりを望んでいるとは思えないが、NLS を通じた学生の研究活動が、企業等で肯定的に評価されると信じている。一方、学生は教員よりはるかに産業界の求めるキーワードに敏感で、ソサイエティでは、学生の意志にも寄り添いつつ、魅力あるテーマを開発し、育てていく必要があると思われる。

会長として筆者が上記の問題点や期待に対する所信を持っていないことは大変問題に思われるが、その分、卓越した指導力のある先生柄、有能な NLS 幹事並びに運営委員の方々によって、すでに次々と施策が打たれている、すなわち、NLS 自体が活潑に機能していることの表れと理解されたい。

最後に雑談たる極め付きのエピソードにて稿を終えることにする。他のソサイエティに足並みを揃えるため、昨年度から NLS においても次期会長選出選挙が実施された。筆者は運営委員の互選による最後の会長となるようである。歴代会長の記事にも互選・就任に関する罵<sup>(2)</sup>や逡巡<sup>(6)</sup>、怨嗟<sup>(3)</sup>がほのめかされている。筆者の場合は電話にて打診がやってきて、特に躊躇せず引き受けたが、電話口では宴会場の喧騒が

聞こえていた。ところが後日、NLS 運営委員会にて初代会長堀尾先生から、「ところでウエタさんって、どうやって次期会長になったんだっけ？」という恐ろしい質問があり、そのプロセスを知らない筆者は、口ごもってしまった。やはり組織的に、推薦・選挙という流れを経ることが、説明責任・追跡可能性の担保に必要なだと実感した。

## 文 献

- (1) 藤原 融, 堀尾善彦, “NOLTA ソサイエティの発足 (ESS ニュース),” IEICE Fundamentals Review, vol. 8, no. 2, pp. 115-116, Oct. 2014.
- (2) 合原一幸, “非線形理論の将来に向けて,” IEICE Fundamentals Review, vol. 9, no. 2, pp. 82-83, Oct. 2015.
- (3) 土井伸二, “非線形って…” IEICE Fundamentals Review, vol. 10, no. 2, pp. 89-90, Oct. 2016.
- (4) 池口 徹, “NOLTA ソサイエティって?,” IEICE Fundamentals Review, vol. 11, no. 1, pp. 4-5, July 2017.
- (5) 田口 亮, “新ソサイエティ誕生に思うこと,” IEICE Fundamentals Review, vol. 10, no. 2, pp. 91-92, Oct. 2016.
- (6) 神野健哉, “NOLTA ソサイエティが共にあらんことを,” IEICE Fundamentals Review, vol. 12, no. 1, pp. 5-6, July 2018.

## 著者紹介

上田哲史 (正員: シニア会員)

平 2 徳島大・工・電子卒。平 4 同大学・大学院博士前期課程了。同年同大学・工・知能情報工学科助手。平 10 米ヒューストン大客員研究員。平 21 徳島大・高度情報化基盤センター教授。現在、同大学・副理事・情報センター教授・センター長。博士 (工学)。分岐問題の数値計算アルゴリズム開発、カオス制御、ハイブリッドシステムの解析に従事。平 24 非線形問題研究専門委員会委員長。平 25 NOLTA, IEICE 編集幹事。平 27 NOLTA2015 共同実行委員長。令元 NOLTA ソサイエティ会長。著書「C によるカオス CG」(共著, サイエンス社, 1994)「Analysis and Control of Complex Dynamical Systems」(編著, Springer, 2015)。